様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３４４４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０１０４０

研究課題名（和文）看護リテラシー教育としての看護過程を活性化するIBL教育プログラム開発

研究課題名（英文）Development of Inquiry Based Learning Approaches to Activate the Nursing Process as Nursing Literacy Education

研究代表者
青山　美智代（Aoyama, Michiyo）

四條畷学園大学・看護学部・教授

研究者番号：８０２６４８２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　大学教育における看護過程の教育内容を把握するために、看護の思考の中心としてのアセスメントを主に教える全国の看護系大学の看護過程のシラバスを分析し、探求型学習であるIBLによる看護アセスメント教育における思考論証能力の多面的評価を行った。
　看護過程が基盤とする米国看護学の文化的コンテクストの把握のため、キリスト教社会における看護職の成立を辿った。米国看護学由来の用語の活用実態について、臨床看護師にインタビュー調査を行い、活用における問題点を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　看護過程は思考論証が中心的学習内容であるはずだが、看護系大学における看護過程はシラバス分析から見ると論証的思考力に焦点があるとは言えないという課題が見つかった。
　看護過程が生まれた米国看護学が前提とする文化的、歴史的、社会的背景の理解により、日本人が明示的には意識しないが実は看護に大きく影響している道徳性（宗教性）と女性の生き方という面を改めて認識することで、歴史的、社会的存在としての看護職をより重層的に理解でき、将来への展望も与えうる。米国看護学由来の用語を日本の臨床看護師がどう活用しているかの実態調査により、言語化と共有、確認という面での日本人看護師の抱える問題点が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：　We analyzed the syllabi of nursing processes in 4-year nursing colleges across Japan that primarily teach assessment as the core of nursing thinking to understand the content of nursing processes in college education, and conducted a multidimensional evaluation of thinking-argumentation skills in nursing assessment education using IBL, an inquiry-based learning approach.
　To understand the cultural context of American nursing science, on which the nursing process is based, we traced the formation of professional nurses in a Christian society and conducted interviews with clinical nurses regarding the actual utilization of the terminology derived from American nursing science to identify problems in its utilization.

研究分野：看護学

キーワード：看護過程　IBL学習法　論証的思考　米国看護学用語　看護の職業化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)看護リテラシー教育の動向と課題

2011 年の文科省の大学看護教育の検討会では、創造的思考力育成と学士力と看護実践能力の統合が必要とされたように、看護問題の複雑化、入院期間の短縮化、電子カルテの普及などの看護サービス提供環境の変化により、看護基礎教育分野では課題発見に必要な看護リテラシー（論証的思考力・判断力）の育成の必要性が認識されている。文科省により「学士課程版看護実践能力と到達目標」は示されたが、看護師教育として何を課題とし、その解決に取り組むかは、各大学の主体的な設定能力と問題解決力にかかっている。

(2)「看護過程」科目の動向と課題

現在の大学看護教育で、問題発見、解決に向けた思考力、判断力、すなわち看護リテラシーの習得を主として担っているのは「看護過程」科目である。しかしながら、現状では、看護過程には標準的な教科書や共有された教育プログラムもなく、またアセスメント（情報収集、分析）の「枠組み」にデータを無理やり当てはめる作業に終始しているという批判も聞かれるが、実態は十分に把握されてはいない。

その理由として、「看護過程」教育がアメリカ看護理論の導入によって始まり、アメリカ由来のカタカナ用語、概念を教員自身不消化のまま使用して学生にアセスメントを教えるため、十分な理解を教員学生双方が持たないまま、ともかく「枠組み」を使用してアセスメントシートを埋める機械的作業が看護過程の授業内容となることが常態化している。しかし、問題発見、仮説生成、情報収集という看護リテラシーの能力のうちで、アセスメントシートを埋めることは、患者情報から推察した仮説を補強するエビデンスを列挙することに過ぎないので、看護過程の一部に過ぎないアセスメントシート作成が、学生の主体的、論理的な思考、判断力を育成するわけではない。

(3)用語の理解と看護の歴史的背景

アメリカ由来の看護用語や概念の理解や活用については、十分な検討がなく、実態は明らかではない。さらにその背景として、日本の看護教員がアメリカ看護学を先進的なものとして導入に努めてきたものの、アメリカの社会、文化の知識を持たず、用語、概念の本質的な理解を得る機会がないまま、教育にアメリカ由来の用語に対して確信を持てずに使っていることが、用語の問題を引き起こしている可能性がある。アメリカ看護の文化的、歴史的背景を理解することで、アメリカ看護の考え方、視点をよりよく理解できるようになると考えられるので、日本の看護に合わせてそれらをどう変容させ、活用していけるかを考えるうえでは、アメリカ看護の文化的、歴史的背景の理解は看護教育には必要であると思われるが、国家試験でも扱われず、現状ではそのような内容の教育は一般的には行われているとは言えない。

２．研究の目的

(1) 看護リテラシー教育の動向と課題

①看護アセスメント教育における Inquiry Based Learning の学習効果

IBL による学生のアセスメントの生データから思考プロセスを明らかにし、IBL による看護アセスメント学習の効果を明らかにすることを目的とする。

②IBL による論証的思考能力の多面的評価

ジェネリック・スキルと自己教育力の評価尺度を用いて、IBLによる能力獲得効果の検討を目的とする。

③看護教育における知識の構築－IBLの基盤となる考え方

学習者中心教育であるIBL教育がなぜ看護教育に必要なのかを考察する。

(2)「看護過程」科目の動向と課題

①看護過程のシラバス分析－その１

WEB公開された大学シラバスから、看護過程の展開に関する科目の科目名・単位数・時間数・配当学年のデータを収集し、全体的な傾向を知ることを目的とする。

②看護過程のシラバス分析－その２

その１の結果を踏まえ、大学シラバスの看護過程授業内容からキーワード抽出し、科目の位置付け、その共通性を把握することを目的とする。

(3)用語の理解と看護の歴史的背景

①文化を越えた環境におけるアサーティブネス：文化的自己観とアメリカとアジアの看護師

医療人類学の視点からアジア系看護師のアサーティプネスを文化的観点から考察する。

②キリスト教社会における看護の職業化プロセス

フランス、英国を中心とした国内外の関連文献から、中世から近代の人の世話に関する修道女の活動の歴史と病院の始まりから看護職の誕生までの経過の記述を目的とする。

③アメリカ看護理論周辺用語のわかりにくさの解明(1)

アメリカ看護理論周辺用語のわかりにくさの背景の検討を行い、その実態のインタビュー調査のための用語リストの作成を目的とする。

④アメリカ看護理論周辺用語のわかりにくさの解明(2)

アメリカ看護理論周辺用語のわかりにくさの実態のインタビュー調査を目的とする。

３．研究の方法

(1)看護リテラシー教育の動向と課題

①看護アセスメント教育におけるInquiry Based Learningの学習効果

IBLによる演習を受講した2年次学生 で同意が得られた7名を対象とし、気管支拡張症と呼吸器感染症で入院している 48 歳の患者の訴えを中心とした 18 センテンスの情報からなる事例を３つに分けて提示し、(A) 事例に含まれる情報のうち学生が着眼する事実 (B) 学生が構築する仮説 (C) 足りない情報 (D) 調べる項目、に分けて学生の記述内容の関連性を見た。

②IBLによる論証的思考能力の多面的評価

同意が得られた4年次学生4名を対象とし、IBLによって獲得する力を、社会人基礎力 PROG (Progress Report on Generic Skills)および自己学習力志向性 SDLRS(Self-Directed Learning Readiness Scale)によって測定した。 調査はIBLの開始前後で2回測定した。

③看護教育における知識の構築－IBLの基盤となる考え方

教師中心型教育と情報の稀少性の関係、教師中心型教育の看護教育への影響、探求型教育法、知の絶え間ない改造、知識の生成と構築主義、Deweyの問題的状況と駆動質問などの視点から、IBL教育の必要性を考察した。

(2)「看護過程」科目の動向と課題

①看護過程のシラバス分析―その１

2018 年日本看護系大学協議会の会員校 277 大学の WEB 公開シラバスから看護過程の展開に関する授業科目①大学名②科目名③配当学年④単位数をデータとして分析した。科目名称の分析は、Word Miner を用いた。

②看護過程のシラバス分析―その２

シラバス内の「概要」「目的」「目標」「テーマ」「ねらい」の記述内容をデータとし、Word Miner を用いて分析した。

(3)用語の理解と看護の歴史的背景

①文化を越えた環境におけるアサーティブネス

Galanti の異文化看護論（2014）のアジア系看護師のアサーティブネスに対する困難さの事例と北山の文化的自己観から、アジア固有のアサーティブネスの問題点を考察した。

②キリスト教社会における看護の職業化プロセス

フランス、英国の中世～近代の人の世話に関する修道院の活動、医療、病院、女性の職業と看護の職業化に関する国内外の関連文献から知見を記述した。

③アメリカ看護理論周辺用語のわかりにくさの解明(1)

アメリカ看護理論周辺用語のわかりにくさの背景の検討のために、看護理論用語導入の背景、日本の看護の文化的差異への気づき、翻訳された看護診断ラベルの持つ問題などを文献から検討し、とりあげるべき用語、概念などをテキストから抽出した。

④アメリカ看護理論周辺用語のわかりにくさの解明(2)

機縁法で募集した臨床看護師 4 名に対して、インタビューガイドとして抽出したアメリカ看護周辺用語、概念から作成した 29 項目リストをもとに自由回答の個別インタビューを行った。

４．研究成果

(1)看護リテラシー教育としての IBL

従来の教師中心型教育は情報が稀少であった時代の教育モデルであり、情報過剰な現代では学習者が自ら情報を選択して、知を構築する教育モデルがふさわしいことを考察し、臨床判断が求められる看護師教育には自ら仮説を立てる探求型すなわち IBL が必要であるという結論に至った（研究③）。思考の迅速性、正確性、柔軟性を育てる Inquiry Based Learning （IBL）の「看護過程」学習における有効性を検討し（研究①）、IBL の看護アセスメントにおける効果、および IBL による思考・論証能力の多面的評価で、IBL を実施した後、論証的思考力が向上したことが示唆された（研究②）。

(2)「看護過程」科目の動向と課題

看護過程には標準的な教科書がなく、看護過程が米国から我が国に導入されて 30 年以上経過するので授業計画の共通性を予測したが、ばらばらであった（研究①）授業の目的、目標、テーマ、ねらいなどの項目ごとの記述内容をテキストマイニングによる分析を実施した結果、構成要素は類義語や言いかえが多く、出現数が多いのは、「看護」「過程」「患者・対象者・クライアント・対象」「基本・基礎・基本的・基礎的」「問題・課題・問題点」「展開」「事例・紙上・模擬・ペーパーペーシェント・紙面」「実践」「理解」「思考」「必要性・必要」「解決」「人・人々・人間・個人」「健康」「プロセス」であった。共通していたのは、専門職に必要な技術、科学的・系統的・具体的な思考の重視という位置づけ、事例を使う学習方法であったが、一方、科学的思考の具体的な意味は記述されていなかった（研究②）。

(3) 用語の理解と看護の歴史的背景

アジアの看護師にはアメリカの看護師とは違った傾向があるのではないか、という視点から、医療人類学者による異文化看護の事例集を検討し、文化的自己観の違いが関与している可能性があることが示唆された（研究①）。看護理論用語導入の背景、日本の看護の文化的差異への気づき、翻訳された看護診断ラベルの持つ問題などを文献から検討し、看護教育教科書で扱われる看護理論周辺用語をから、文化的歴史的コンテクストが深く関わると考えられる 29 項目に絞って「わかりにくい、使いにくい看護用語、概念」リストを作成した（研究②）。前述のリストを用いて、臨床看護師に看護理論の理解と使用の実態に関するインタビューを実施し、テキストマイニングで分析した結果、［マッチしない言葉と中身］を中心として、［あてはめがちな看護理論用語の実態と乖離］［セルフケア概念の活用実態］［クリティークの圧迫］［対応が優先］［根拠とか知識…］［記録・意見交換不足による患者の苦しみ］［掘り下げる思考がなく行き詰る］［ソーシャルサポート・スピリチュアルケアの活用］というカテゴリーが抽出され、言葉と中身の乖離、理論と実践の乖離、言語化の不足という状況が示された。乖離や不足を埋めるための質問や議論の不足があり、質問・議論・検討に必要な、書面・口頭両方の言語化に対する抵抗や不慣れもあることが窺え、質問を批判とみなす日本文化固有の傾向が関与していると思われ、結果として議論、思考を深めることが阻害されている。そのため、上司、指導者が下位者の心理的抵抗を解消し、議論に慣れるような環境を整える必要性が示唆された（研究④）。

米国看護理論の生成に影響した医療事情、女性の社会化に関して、修道院と看護のかかわり、愛徳姉妹会などのフランスの看護修道女の活動、病院が修道院から分離独立していく歴史的経過、フランス第三共和政治における看護の世俗化と職業化のプロセスなどについて、文献検討を行った結果、修道女や看護婦の選択の背景には、女性に結婚以外の生き方を開く意味が大きく、同時に、修道女と看護の世俗化は複雑な関係があったことを確認した。修道院外では、慈善活動の実践者として低い階級出身者の「姉妹」が養成され、広く独身女性に名誉ある人生の選択を提供した。英国では、近代医学の進歩、教育病院での修道女による実務訓練と道徳教育により、世話は宗教的道徳性を残しつつ、労働者階級的な雑役業務から分離され、より医学的、専門的な内容となり、独身中流階級女性の名誉ある生計維持手段として看護の職業化が進んだ。独身女性の職業としての看護職と、世話を神への奉仕とみなしたことに由来する宗教性、道徳性は、余り指摘されない米国看護理論の文化的背景として認識すべきである（研究②）。

＜引用文献＞

文部科学省：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告,2011
文部科学省：学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標,2011

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 青山美智代，勝井伸子	４．巻 5
２．論文標題 修道女の歴史と看護の職業化	５．発行年 2022年
３．雑誌名 四條畷学園大学看護ジャーナル	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15110/00000852	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 青山美智代，勝井伸子，西薗貞子	４．巻 11
２．論文標題 看護過程の授業はどう展開されているか(2)－看護大学シラバス分析－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 梅花女子大学看護学部紀要	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 勝井伸子，西薗貞子	４．巻 17
２．論文標題 看護教育における知識の構築ーＩＢＬの基盤となる考え方ー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 奈良県立医科大学看護研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 38-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 西薗貞子，勝井伸子	４．巻 17
２．論文標題 看護教育の高等教育化への歩みとアクティブラーニングの要請	５．発行年 2021年
３．雑誌名 奈良県立医科大学看護研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 47-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 勝井伸子，青山美智代	4．巻 15
2．論文標題 アメリカ看護理論周辺用語のわかりにくさの解明(1)	5．発行年 2019年
3．雑誌名 奈良県立医科大学看護学科紀要	6．最初と最後の頁 54-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 青山美智代，勝井伸子，西薗貞子	4．巻 15
2．論文標題 看護過程の授業はどう展開されているか(1)	5．発行年 2019年
3．雑誌名 奈良県立医科大学看護学科紀要	6．最初と最後の頁 62-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Teiko Nishizono	4．巻 -
2．論文標題 CHARACTERISTICS OF NURSING PRACTICAL FUNDAMENTAL CAPABILITIES (LITERACY AND COMPETENCY) BY FUNDAMENTAL EDUCATION AND ACQUIRED QUALIFICATION OF NURSES	5．発行年 2018年
3．雑誌名 INTED2018 Proceedings	6．最初と最後の頁 6576-6581
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 勝井伸子，青山美智代	4．巻 14
2．論文標題 文化を越えた環境におけるアサーティブネス：文化的自己観とアメリカとアジアの看護師	5．発行年 2018年
3．雑誌名 奈良県立医科大学看護学科紀要	6．最初と最後の頁 93-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 青山美智代，西薗貞子	4．巻 14
2．論文標題 看護アセスメント教育におけるInquiry Based Learningの学習効果	5．発行年 2018年
3．雑誌名 奈良県立医科大学看護学科紀要	6．最初と最後の頁 67-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 西薗貞子，青山美智代	4．巻 14
2．論文標題 IBL(Inquiry Based Learning)が高める思考・論証能力の多面的評価	5．発行年 2018年
3．雑誌名 奈良県立医科大学看護学科紀要	6．最初と最後の頁 75-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 西薗貞子，箕浦洋子，赤澤千春，日隈ふみ子，江川隆子，青山美智代
2．発表標題 中堅看護師（ラダーⅢ）のPROG(社会人基礎力測定尺度）評価から 継続教育の課題を考える
3．学会等名 第22回日本看護管理学会学術集会
4．発表年 2018年

1．発表者名 西薗貞子，江川隆子，箕浦洋子，赤澤千春，日隈ふみ子，青山美智代
2．発表標題 大学における基盤教育と卒後継続教育の連携促進を目指した能力評価の共有～汎用性の高い「社会人基礎力評価」調査結果からの意見交換～
3．学会等名 第28回日本看護学教育学会学術集会
4．発表年 2018年

１．発表者名 Teiko Nishizono
２．発表標題 Competency characteristics acquired by mid-level nurses
３．学会等名 IAFOR2019 Tokyo
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	西薗　貞子 (Nishizono Teiko) (50458014)	奈良学園大学・保健医療学部・教授 (34604)	
研究分担者	勝井　伸子 (Katsui Nobuko) (90290436)	奈良県立医科大学・医学部・非常勤講師 (24601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関